日本教育岩手

● 〒020-0024 盛岡市菜園１-11-15　日本教育会岩手県支部　TEL 019-623-8100　● 代表　八重樫　勝

新たな教員研修における校長の役割

岩手県小学校長会
会長　紺野好弘
（盛岡市立桜城小学校長）

令和４年５月の参議院本会議で「教育公務員特例法および教育職員免許法の一部を改正する法律案」が可決され、平成21年度に導入された教員免許更新制は廃止となり、教員の研修等に関する記録の作成及び教員の資質向上に関する指導助言等が新たに義務付けられることとなった。このことに関して校長には、年度当初、教員と対話し、指導力の向上に向けた指導助言を行うとともに、年度末には研修の振り返りを行いながら、キャリアアップにつながるような実効性のある研修にすることが問われることとなる。校長として当該教員の意向を十分にくみ取り、教員が必要とする研修を行うよう万全を期すとともに、教員のさらなる多忙化につながることのないよう十分に配慮する必要がある。

またこのことと関連して教員の資質向上に関する新たな指針改正案も示された。教師に求められる資質能力を、①教職に必要な素養、②学習指導、③生徒指導、④特別な配慮や支援を必要とする子どもへの対応、⑤ＩＣＴや情報・教育データの利活用の五本柱で再構成されている。

まさに教育の不易流行である。①は、教育者としての使命感や教育的愛情等、時代が移り変わっても必要となる資質能力であり、⑤は、データやデジタル技術の活用等、今後必要となるであろう資質能力であり、学習の在り方や教育手法はもとより、教職員の業務等学校教育のあらゆる場面において変革していく必要があるものと捉えている。

変化の激しい時代の中で、学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、主体性を発揮しながら生涯を通じて学び続ける新たな教師の姿を実現していかなければならない。また、そういった教師を育成するうえで校長の役割は極めて大きいと感じる。

忘れてはならないのは「子どもの幸せのために学校がある」という教育の基本的な理念である。今風に言えば「子ども一人ひとりのウェルビーイングを目指し学び続ける教師の育成」が問われている。子どもは本来「できるようになりたい」とか「わかるようになりたい」といった自己実現欲求や「他の人に認められたい」といった承認欲求をもっている存在である。どんな問題を抱えている子どもであってもその本質は変わらない。日々の学校生活の中で、子どもが教師との関わりをとおして、自分自身の進歩や成長を実感したり、他からの承認を嬉しいと感じたりしたとき、子どもは幸せを感じ、自己肯定感を高めていくのではないだろうか。

令和５年４月から開始される教員研修が、校長の指導をもとに一層充実したものとなり、教員の資質向上に資することを願って止まない。

令和４年度 支部講演会の概要

「岩手への道」
―岩手の大地は私の学校―

岩手県議会議員　上原康樹

はじめに

上原康樹です。久しぶりに大勢の皆様の前でお話しをすることになりました。しかもマスクを外して。気持ちのいいものです。存分に呼吸ができます。吸った息を丁寧に言葉や思いに換えていく。人間にとって、こんな素晴らしいプロセスはありません。改めて、この機会を与えていただきました皆様に感謝申し上げます。

初めての入院体験

さて、もうご覧になってお分かりだと思うのですが、私、病気をいたしまして、現段階では、足の動きが少し硬いかもしれません。しかし、自分の思いを述べるということに関しては、十分に可能かと思っておりました。

さて入院の経緯ですが、去年の10月３日、どうも具合が悪いということで、私、県立中央病院へ歩いて行きました。診察の結果、即座に入院ということになりまして、４カ月の病院生活と相なったのでございますが、いまでは、数値的には、まったくの健康体でございます。

希望を持ってリハビリを

しかし、まあ、４カ月の入院生活。リハビリ期間でした。回復すると先生に言われていても、不安なものでございます。前半２カ月は、体力づくりが中心でした。トップアスリートのトレーニングのような世界です。そして、後半の２カ月は高度な整体を受けながら体の柔軟性などを回復させる日々でした。この復活への努力は、病院の先生を頼るばかりでは足りないのです。患者個人がいかに頑張るかに係っているのです。基礎的なトレーニングを徹底して反復することで体が本来の動きを思い出し目覚めていく。そういう道のりです。私は、一刻も早い復帰を願って自主トレーニングに励みました。季節は岩手の真冬。ものすごい寒さです。でも、私は熱かった。燃えていました。朝は５時半に起きて、病院の廊下を１時間歩き続けます。続けてスクワットなどの筋力の鍛錬です。もう、気力の世界です。でも不思議に希望がありました。それは、病院の窓の外に広がる雪景色でした。そこに岩手の春を重ねて見ていたのです。新緑の岩手山麓を駆け回る日を思い浮かべるのです。そんな思いは歩調に拍車をかけ、競歩のようになります。やがて薄暗い病院の回廊にも朝の光が射しこみます。その美しいこと。命が溢れて来る感覚です。そんな嬉々とした私の様子を病院の皆さんは見守ってくださったのです。「上原さんは、朝も歩く。昼も歩く。夜も歩く。ひたすらよく歩きます。」と嬉しそうに呆れて下さるのです。その言葉に励まされて私の歩幅は広がっていったのです。そして迎えた１月28日。退院。その日のうちに運転免許センターで適性検査。これも合格。愛する岩手の道を再び走れる喜びです。ああ、私は戻って来たのだという実感を握りしめました。

岩手への思いが募って

アナウンサーから議員へという、非常にダイナミックといえばダイナミック、見る人からすれば唐突、しかも岩手に全然縁もゆかりもない人でしょうといわれるかもしれないけれども、これまで仕事上でも、個人的にも岩手に入れ込む、その理由は何だろうか。

私は、平成８年に岩手に参りました。初めての北東北です。中学、高校は福島県喜多方市におりました。この北東北は全く未経験で、想像もできませんでした。仙台から新幹線で北上しますと、だんだん木々の緑の感じが変わってくるのです。針葉樹から広葉樹に、木々のざわめきが大きいわけです。まさに宮澤賢治の世界「イーハトーブ」です。そんなイーハトーブに巡り会って、私は３年間「おばんですいわて」を担当いたしました。そこですっかり岩手というところの自然の美しさ、人間にとって自然がなくてはならないということを学んで、また人々の優しさにすっかり惚れ込んでしまいました。３年たって名古屋に転勤したのですがもう岩手のことが頭から離れないのです。毎日、岩手で撮った写真を家内と２人で見まして、「俺はもう岩手でないと生きてい

けない」と家内にいいました。しかし、ＮＨＫには転勤というハードルがあります。岩手に戻してもらうためには、いい働きをしなければなりません。ものすごく忙しい仕事を一手に引き受け、働きに働きました。そして合間を縫って毎月のように岩手に戻って来ました。名古屋空港で花巻行きの便に乗りまして、上空から北アルプス、佐渡ヶ島、月山、栗駒高原を眼下に見て、そして自分の脳裏に刻まれた岩手県周辺の地図が目の前に広がるわけです。その感動。ああ俺はあの道を走っていたんだ。またこの土地に戻ってきて、この道を走りたいと激しく思いました。もう泣けて泣けてしょうがなかった。泣きました。そうすることによって寂しさが紛れて名古屋で頑張ることができたのです。

岩手への道

平成15年６月盛岡への異動を命ずるという夢のような辞令を受けました。もうれしさが爆発です。戻って来て「おばんですいわて」のキャスター、夜８時45分の岩手のニュースの担当、「ラジオ深夜便」の制作やアンカーそして朗読など夢のような仕事をいっぱい仰せつかりまして、こんなに仕事が楽しいものか、愛する土地で働くことができるということは人間にとって素晴らしいことだと思いました。

皆さんもあちこち転勤があったと思うのですが、私から見て羨ましいなと思うのは全部岩手、岩手から出なくて済むんだということが素晴らしいことだと思います。お仕事は教育現場、忙しいし、大変だと思います。子どもたちと毎日向き合い、戦いもあるでしょう、ご苦労もあるかと思いますが、私は愛する岩手で教育という尊い仕事に取り組める皆様方が羨ましくて仕方がありません。

風変わりな天気予報

私はこのままずっと岩手にいるまま定年を迎え、仕事を終えたいと思っておりました。組織というものはそう簡単に思い通りになるものではありませんが、紆余曲折があり、とうとうもう他への転勤はない、盛岡で退職できると決まったとき、私に春が来たのです。それで、自分自身の喜びを押さえられなくなりちょっとあり得ない天気予報を始めるようになってしまいました。春が来れば春の喜び、秋が来れば秋の美しさ、そういったものを天気予報の文言の中にたくさん詰め込みました。最初は視聴者から、「何だ！あの天気予報は」と放送部長に文句が来たようです。いい放送部長で、我慢強く私を弁護してくれました。最後まで自由にやらせてくれたＮＨＫに感謝しかありません。

講演の様子

教育について思うこと

私も文教委員会の委員の１人として（令和３年８月まで）先生方の想像を絶する日頃のご苦労のことは存じ上げております。本当に感謝いたします。私の学校生活を振り返り、忘れられないことがありまして、ここで初めてお話します。60年前、小学校５年生の時のこと。私、教室で先生にひっぱたかれました。ビンタです。その先生は、父親のような年齢で、実際、日頃、父親のように優しく厳しく、家族のように私のことを思ってくれていた方です。大好きなその先生にビンタを頂いた理由は、先生が不在の日、友人と取っ組み合いの喧嘩をしました。先生が戻って来た日の朝会。先生は私に尋ねました。「康樹、先生に報告することは何も無かったか」。私は喧嘩がばれると叱られると思い「はい、ありませんでした」と皆の前で嘘をつきました。次の瞬間、先生の平手が飛んできました。私は、その手の感触に先生の気持ちをうけ止めました。喧嘩のことより嘘をついたことが悲しかったのです。先生の切ない思いが頬に残りました。嘘は人を幸せにしない。子ども心に学んだわけです。現代的な視点に立てば、このエピソードが許されるはずはありません。この記憶は、今の学校と比べるような次元のものではありません。そういう時代があったということです。そういう先生もいた。生徒もいた。ということです。学校生活の様々な場面で先生と生徒が心で結ばれていたことで成立する教育があったのかもしれません。さて、あの朝会の後、教室は何事も無かったように授業を始めていました。私は、目を覚ました少年のように黒板を見つめていました。その週末、私は友達と先生のポンコツ車に乗ってハゼ釣りに連れていってもらいました。

大人になって岩手に来てからも、多くの人々に教えられ、助けられ導かれて来ました。岩手という大地は私の学校であり、教室です。その恩返しは、愚直なまでに正直に岩手に向き合うということだと心に決めております。思えば、あの真冬のリハビリの日々。一番つらいときなのに、私は笑顔でした。退院の日が待ち遠しくて楽しみでなりませんでした。目標を持ち、夢を忘れなければ、人は歩き続けられます。

今日は本当にありがとうございました。

第30回　学校心理カウンセラー研修講座

子どもの心に寄り添った支援とは

山田町立豊間根小学校
校長　冨澤　広子

近年、学校不適応などカウンセリングや教育相談を必要とする問題が増加しています。この問題に対して、教師や保護者に対する相談、助言についての知識や技術の習得を目的として、（公社）日本教育会主催「令和４年度第30回学校心理カウンセラー研修講座」が８月１日から３日間、札幌市で開催されました。本県からオンラインで参加した２名の先生から研修を受けた感想をお寄せ頂きました。

オンラインで研修中の冨澤校長

この３日間は、学校心理学、援助チーム、心の健康、発達障がいの理解と支援について等、５人の講師を迎え大変充実した研修となりました。

まずは１日目、石隈・家近教授による「心理教育援助サービスの作り方・あり方」について。誰に何をどう援助するかチームスタッフ全員がしっかり共有し、同じ目標に向かって進めていくことの重要性を学びました。

２日・３日目は、大河原心理療法研究室室長、小泉名誉教授、宮本教授らによる講話で『子どもに脅威を与えて瞬時に良い子になることはうまくいったことではない』『何度言っても言うことを聞かないではなく、子どもが違ってとらえていないか』等、ハッとさせられる話ばかりで、さらにそれらについて事例をおりまぜた非常にわかりやすい説明を受けました。

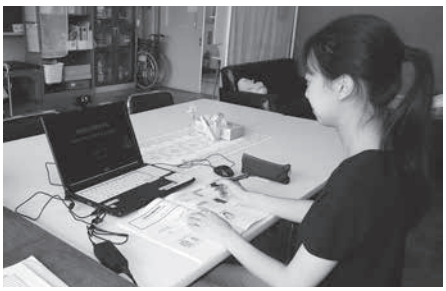
今後、様々な問題が起こるであろう子どもの心の状態をしっかりととらえ、多くの問題行動の背景にも目を向けることを職員と共有すべきと感じました。また、地域等の関係機関と連携したチームも再度見直し、今後の学校経営にしっかりと生かしていきたいと思う意義深い研修でした。

「目の前の子どもを理解し援助するために」

宮古市立津軽石中学校
養護教諭　菊池　さくら

初めて学校心理カウンセラー研修講座を受講させていただき、最初は少し緊張していましたが、充実した内容の研修やグループワークを通して、児童生徒の理解と援助の方法を様々学ぶことができました。

どの講義も学びの多いものでしたが、特に勉強になったのは、大河原美以先生の「『怒り』感情の大切さと心の健康」の講義でお話しいただいた、「感情コントロールをできない子の背景には不快感情を適切に処理できない困り感と苦しみがある」、という内容です。また、子どもが不快感情を適切に処理するために大切なのは、大人がその気持ちを汲み取り言葉で共感することだと学びました。そのためにも、自分が子どもの立場になって考えることや気持ちを受容することを大事にしたいです。



オンラインで研修中の菊池教諭

実際に今まで、ついカッとなって暴言・暴力で表現してしまう生徒や、泣いて固まってしまう生徒に関わることがありました。その時の自分の関わり方の反省と、この３日間を通して学んだことを、今日の前にいる生徒たちの理解と援助に活かせればと思います。また、引き続き勉強しながら、組織の一員として、子どもたちが素敵な大人になれるよう支援をしていきたいです。

令和４年度第47回 全国教育大会鹿児島大会

岩大附属中 平澤傑教諭の提言

―岩手から思いをこめた発信―

10月29日（土）日に、鹿児島県鹿児島市において「第47回全国教育大会鹿児島大会」が開催される。コロナ禍が続く３年目は、会場とオンラインでの参加となる。この大会の要は、幼稚園から特別支援学校までの各園・各校種からの提言で、この提言を通して、児童・生徒の発達段階への理解を深めるとともに、教育の充実につながる視点・取り組みについて学ぶ機会となる。中学校領域は、岩手大学教育学部附属中学校の研究主任平澤傑教諭が、「新しい社会を生き抜く『人間の強み』を育む学びの追究」について提言を行う。この研究は、昨年度の「第12回教育実践顕彰事業」で最高賞の会長賞を受賞し、「これからの学校教育に求められる先進的な実践」と高く評価されている。５月に行われた学校公開教育研究発表会では、その具現化となる16の授業が公開された。各教科等の特性と研究との関連が吟味されており、授業ではＩＣＴの活用と「主体的で対話的な深い学び」が位置づけられ、「人間の強み」を発揮するための資質・能力の育成への道筋が明確にされている。伸びやかで真剣に学ぶ生徒の姿をはじめ、随所に研究の成果が現れていた。全体会での平澤教諭による研究説明は、限られた時間の中で提示や話し方が工夫されており素晴らしいプレゼンテーションであった。鹿児島大会でも、その姿が見られることと思われる。ともに歩む附属中学校の教職員を代表して、岩手から思いを込めた発信をとなる。

（副支部長　高橋ひさ子）

提言を行う平澤教諭

全国教育大会 鹿児島大会の日程及び岩手県支部の参加状況

●日程

(1)開会式　10時

(2)趣旨説明・提言　10時30分

①幼稚園　東京都文京区立小日向台町幼稚園　園長　吉羽優子氏

②小学校　鹿児島姶良市立帖佐小学校長　牧野田弘一氏

③中学校　岩手大学教育学部附中学校　教諭　平澤　傑氏

④高等学校　宮城県仙台第三高等学校長　佐々木克敬氏

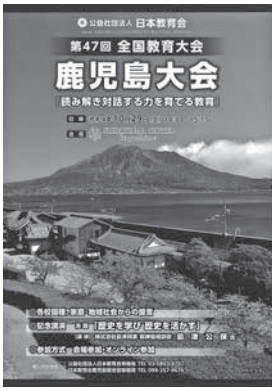
⑤特別支援学校　愛知県立三好特別支援学校　教諭　古橋仁美氏

⑥家庭・地域社会　特定非営利活動法人まちと学校のみらい（神奈川）　代表理事　竹原和泉氏

(3)記念講演　13時20分

演題「歴史を学び　歴史を生かす」

講師　株式会社島津興業取締役相談役　島津公保　氏



大会のポスター

(4)閉会式　15時

●参加状況

今年度は、岩手大学教育学部附属中学校の平澤傑教諭が中学校の部で提言をすることもあり、参加費２千円を支部で負担することとし、広く会員の皆様に参加をお願いした。特にも、この２年間中止となっていた主幹教諭研修派遣事業をこの鹿児島大会に位置付け、新任の主幹教諭の先生方にも参加を呼びかけた。盛岡地区会の佐々木真氏には、鹿児島市会場に直接ご参加をいただくことになっている。

開催日が10月末で諸行事と重なる学校が多く、希望される先生方はそれほど多くないが、地区会の役員をはじめ、支部事務局を合わせて十数名の先生方に参加をいただく予定である。

一関西地区会の佐々木事務局長は、「島津興業の社長さんの講演を楽しみにしている。学校や自宅で気軽に研修できるのがありがたい」と話している。

地区会だより

江刺地区会

歴史から学ぶ貴重な講演

７月２日、３年ぶりに総会並びに研修会を開催しました。40名の会員の参加でした。

総会では、奥州市教育委員会の髙橋勝教育長からご祝辞を頂きました。総会に引き続き行われた研修会では、「１００年前のパンデミック」と題して、岩手県立博物館の目時和哉専門学芸調査員から講演をいただきました。

講演する目時和哉氏

１００年前、原敬内閣総理大臣当時の日本では、スペイン風邪が猛威を振るっていました。

国内は、「物資の欠乏」「医療崩壊」「学校閉鎖」が見られました。対策は「患者の隔離」「消毒」「患者の鼻水、痰などの適切な処理」「患者や疑いのある者への接近回避」「衆人雑踏する場所への回避」「発症した際の受診」「室内の清潔」などでした。

科学・医療・情報技術など進歩している現在ですが、新型コロナ感染への対応は、１００年前とほとんど変わっていないように感じました。

歴史から学び、それを更に進化させることが今求められていると考えます。

子ども達が我慢を強いられることなく伸び伸びと過ごすことができる日々が早く戻ってくることを願うばかりです。

（事務局長　晴山　光弘）

盛岡地区会

３年ぶりの総会・講演会の開催

７月５日（火）、サンセール盛岡で、定期総会と、退職校長会との共催で講演会を開催しました。

総会には、県支部から八重樫勝支部長様をはじめ６名のご来賓の方々においでいただき、87名の地区会員の参加のもと、令和４年度活動計画、予算案等を協議し承認いただきました。

引き続き講演会では、テレビでもおなじみの盛岡市保健所　矢野亮佑所長から、「新型コロナウイルス感染症　基本から今後」と題してご講演を頂戴しました。圧倒的な知識量と実績、そして感染拡大防止への強い思いに溢れた講演に、一同納得の90分間となりました。特にも、令和２年４月に赴任してからの保健所の体制整備や続々出現する新種株への対応など、矢野所長だからこそ乗り越えられてきたのだという実感を持ちました。ウィズコロナに向け、正しい認識のもと、恐れず、油断せず、冷静な判断と適切な対応が大切であることを確認しました。

久しぶりの参集型の総会、講演会で、参加された方々は、顔を合わせて同じ時間を過ごせる喜びを感じ、笑顔でお帰りいただきました。

（事務局長　高畑　嗣人）

講演をする矢野盛岡市保健所長

九戸地区会

シンポジウムを開催

７月６日（水）「久慈グランドホテル」において、令和４年度九戸地区会の会員66名の参加のもと、総会・研修会を開催することができました。ここ数年、中止や延期、そして規模縮小となっていた当地区会の事業計画も理事会での話し合いの末、感染状況を考慮しつつ、総会と研修会までは実施したいという結論に至りました。次年度には旧交を温めることがで

きるよう、懇親会までの実施を切望しています。

今年の研修会は、シンポジウムとして開催しました。演題を「スポーツの魅力と選手育成」とし、シンポジストにレスリング指導者、種市高校の濱道秀人先生と、ウエイトリフティング指導者、久慈工業高校の芦渡翔先生をお迎えして行いました。両講師からは、それぞれの競技の紹介と部活動の様子が話されました。両競技とも高校に入学後に初めて接する種目になる生徒がほとんどですが、多くの選手を全国大会に出場させています。また、選手育成とともに人間教育を重視していることも心に残るお話でした。決してメジャーなスポーツではないかもしれませんが、当地区にはこのように輝くことができる子どもたちがたくさんいることを再確認できました。（事務局長　松岡　聡）

シンポジウムの様子

スポット その177

岩手県中学校長会　会長
理事　**佐野　理 氏**
（盛岡市立上田中学校　校長）

令和４年度の学校経営における重点は「改革・楽校・一丸・生徒が主役・働きがい・やりがい」です。教育は「愛」と「信頼」です。

４月１日の職員会議の冒頭で私たち教職員全員に校長先生がお話しされた言葉です。この想いは、今年度の第74代生徒会スローガン「愛と先へ」にも受け継がれており、生徒・教職員・地域が一丸となった「笑顔に溢れる楽しい学校」となっています。

佐野理校長先生は、令和元年度に第20代校長として上田中学校に着任され、今年度は岩手県中学校長会会長として、多忙な日々を送られています。教育行政に長く携わってきた豊富なご経験をもとに、「上田中学校だからこそできる教育、やるべき教育、コロナ禍の今だからこそやり抜く教育」を創造していく大切さを親身にご示唆いただきながら、笑顔を絶やさず、愛情をもって、本校の特色を生かした魅力ある学校経営にご尽力されています。

（副校長　田村　大樹）

遠野地区会

文化の地遠野を改めて認識

７月13日（水）「あえりあ遠野」において、令和４年度の遠野地区会総会と講演会が開催されました。コロナ感染の状況を見ながらの開催の判断でしたが、でき得る予防策を徹底することで開催を実現することができました。参加した約50名の会員は、挨拶を交わしたり近況を話したりと、会場は和やかな空気に包まれました。総会に先立って、長きに渡って本会にご尽力いただいた、前会長荒田美知子様への感謝状の贈呈が行われました。また、役員の選出では、新しく就任された細川昭子副会長の「皆さんと一緒に頑張ります。」の言葉に、会員一同、温かな拍手とともに、さらに結束を強める総会となりました。

総会の様子

引き続き、行われた講演会では、『柳田國男全集』編集委員の小田富英氏を講師にお迎えし、「『遠野物語』の一番話―一番有名な話・一番話らしい話・一番奥深い話―」と題して、ご講演をいただきました。貴重な研究資料をもとに語られる一つ一つのお話から、小田先生の遠野物語への深い理解と思いが伝わってきました。講演の最後に「先生方、自分の一番の話をぜひ見つけてください。」と言葉をいただきました。豊かな自然と恵まれた文化の地「遠野」に勤めていることに、あらためて背筋が伸びる思いでした。（事務局長　平　芳則）

シリーズ 学校キラリ⑭

「紫波町に誇りを持ち、町の未来を支える人材の育成」

紫波町立紫波第一中学校　校長　照井英輝

本校は、紫波町の中央部に位置し、基幹産業である農業の耕作地と住宅地が融合した素晴らしい環境にあり、今年度は学級数22、生徒数６２９名、教職員50名の県内でも大規模校の一つです。教育目標に、「潮をなして文化を興す、健康常に心を正す、勤労とともに世界に香る」を掲げ、紫波町の歴史や文化に誇りを持ち、町の担い手として町の発展に寄与しようとする意欲を持った生徒の育成に全職員で取り組んでいます。

本校の特色のある教育活動として、「探究的な学びと系統性」を大切にした総合的な学習の時間の取り組みについて紹介します。

１年「紫波町の歴史・文化を知る」

１年では、歴史講演会と町内のフィールドワークを通じて、町の歴史と文化について学びます。７月の歴史講演会では、毎年、日詰地区先人顕彰会会長の内城弘隆氏をお招きし、縄文時代から現代に至るまでの町の歴史を学びます。その講話から、班テーマと個人課題を設定します。９月に町内の各史跡・施設（西田遺跡、志賀理和気神社、樋爪館、高水寺城、平井邸など）を訪問して、課題に関する情報の収集を行います。

２年「紫波町の産業を学ぶ」

２年では、産業講演会と職場体験を通じて町の産業について学びます。６月の産業講演会では、紫波町役場の産業部長をお招きし、町の産業の状況、人口構成や町の課題、産業に関するプロジェクトについて学びます。生徒はその講話から個人課題を設定し、体験したい職業を選定します。９月には町内外の約１００箇所の事業所を訪問し、職業体験を行います。

３年「紫波町の将来を語る」

３年では、SDGsの視点から紫波町の町づくりについて考えます。７月に学年でSDGsの理念等について学習を行い、９月には町内でSDGsに先進的に取り組んでいる事業所等の方をお招きしてワークショップを行います。その体験から個人課題を設定し、各自で情報の収集を行い、11月に役場、市議会、事業所の方を招待して発表会を行い、町づくりへの提言を行います。

本校として大切にしていることは、個人課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現という問題解決的な活動を繰り返し行い３年間積み上げていくことです。総合的な学習の時間に正面から取り組みことで、各教科等で身に付けた知識と技能が生きて働くこと、学びを通して生徒と教師が共に成長していることを日々感じています。

令和３年度　３年　総合的な学習の時間
学年発表会「町への提言」

山寺の鐘

▼８月16日夜、「京都五山送り火」をテレビ中継で見た。コロナ禍、３年ぶりの完全点火。午後８時に「大文字」の点火が始まる。「妙・法」「舟形」「左大文字」「鳥居形」の順に明かりが灯る。▼ところが、点火１時間前、京都市内に雷鳴が響く。強い雨も。街の東西で天候回復に時間差があり、京都市を囲む五山すべての文字と形に灯がともったのは８時半頃とやや遅れた。名残を惜しむご先祖様の仕業による雷雨ということであれば、十分に納得。▼「灯る大の字を、盃に映して飲むと無病息災に、手鏡に映すとぴんぴんになる。」という言い伝えも聞く。脈々と習わしを大切にする京の流儀を感じる。▼この盆行事、５つの各保存会によって支えられているとのこと。当日はもちろん、山全体の木々の伐採や点火棚の整備、山道確保など、その活動は年間休むことがない。見習いということで、中学生も参加している。京都の中学生にも大拍手！▼来年は、保存会の皆様に感謝しつつ、ぜひ盃を準備して、テレビの前に座りたい。手鏡も一応準備だけはしておく。（治）